

花園大学 日本文学科 通信

第二号

二〇〇九(平成二十一年六月一日発行)

編集・発行 花園大学日本文学科

番号 604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八一

TELE (075) 811-1518
振替 〇一〇五〇一一四三九九五

「ありがとう」という言葉

森本 麻文

花園大学を卒業して早二年。私は今、食品スーパーのレジチーフとして働いています。

スーパーのレジといえば、パートの奥様や学生アルバイトでお馴染みの、わりと身近な職業です。会社によつて多少違ひがあると思いますが、私の勤めるスーパーのレジの仕事は「レジ清算」「進物の販売・包装」「お客様情報の管理」などが主となつております。私はお客様の接客は勿論の事、パートやアルバイトの方のフォロー・指導を担当しています。

スーパーには、毎日色々なお客様がいらっしゃいます。頻繁に通つて下さる方も多く、いつも同じ菓子を一つだけ買い求めるお客様、毎回若い女の子のレジにしか並ばないお客様など、人それぞれに個性がありとても面白いです。また、土地によって熨斗の書き方や贈られて喜ばれる品物の違い、お客様も従業員もおつとりとした人の多い地域や自己主張のはつきりした人の多い地域など様々で、この二年間で四度の転勤と三度の引っ越しを経験し、その違いをひしひしと実感しました。時にはその土地には合わない事をしてしまい不興を買つてしまふ事もあり

ましたが、今では良い勉強になつたと思つています。

毎日の仕事の中で私が一番嬉しく感じる事、それは「ありがとう」と仰つて頂く事です。お客様から、もしくは同じ仕事仲間からの「ありがとう」。その一言でその人のお役に立てたと感じられた時、思わず鼻歌が出てしまうほど本当に嬉しいです。如何にして誰かに喜んで頂くか、それが私の日々の課題となっています。

仕事は楽しい事ばかりではなく、とても辛い時もあります。ですが、そんな時に力になつてくれるのは、大学時代の友人達です。稼ぎ時である土日祝日、お盆や年末年始も年中無休の為に休みが合わずなかなか会う事はできませんが、やつと会えた時には美味しい酒を飲み夜中語り明かす事ができる、素晴らしい存在です。まだまだ未熟な私ですが、お客様や周りの方の「ありがとうございます」が友達との楽しい時間を糧に、これからも元気に頑張つていこうと思います。

(二〇〇六年卒業生)

国文学科を卒業して

山内みさ

国文学科を卒業して四年が経ちます。その間国

文学科は日本文学科と創造表現学科の二学科に改編し新たなスタートを切りました。私も三月に結婚し、新たな人生を歩み始めました。結婚といえば、長年連れ添つた夫婦は固有名詞を出さずとも「あれ」「それ」といつた指示語で言いたいことはわかる、それくらいお互いのことを理解している、というエピソードはよく聞かれると思います。インターネットで「夫婦 指示語」と検索してみても多くの逸話が挙がります。

それが最近は、家庭内よりも勤務先で「あれ、欲しいんですけど」と頻繁に指示語を耳にします。が、来窓された方がよく使われるのです。

仕事でのことなので、長年連れ添つた夫婦でなくとも何が欲しいのか凡そ見当はつけます。が、相手の欲しているものとこちらの考えているものが違うことはよくあります。夫婦間では笑い話で済むことも、仕事においては笑つてすむことばかりではありません。お互いの認識がずれたまま話は食い違い、時間はかかり必要な情報はわからぬい、ともすれば間違つた情報を入手するという双方の不利益ばかりになりかねません。

私も咄嗟に言葉が出てこないときはあります。ですが、簡単だからと指示語ですますのではなく、相手の理解力に甘えずそれに関係する言葉で伝えようとする努力は大切だと思います。それは日本文学科の卒業生であれば尚更ではないでしょうか。社会に出たとき、「日本文学科を卒業しているのに」と言わわれるのは自分自身です。四年をかけて文学を学ぶのですから、胸を張つて日本文学科を卒業したと言える力を身につけて欲しいと思います。貴重な四年間を無駄にせず、有益なものにで

きるよう頑張つてください。教務課で皆さんのが力を応援しています。

(一〇〇五年度国文学科卒業生)

名前と日本語学

余田 弘実

毎年、講義の最初では黒板に「余田弘実」と書き「私はヨダではありません。ヨーテンです。『ヨダ先生』と呼んだら、授業に出席したことのない学生とみなし、落ちて頂きます」と自己紹介することにしている。面倒なので、普通はここで止めることが多いが、偶に「下の方もヒロミではなくクミです」などと言うと、初対面の学生さん達は、みな様に驚いたような表情を浮かべる。

某大学で担当している言葉と文化に関する講義で、今年は「名前」について触れてみようと思い、佐藤稔『読みにくい名前はなぜ増えたのか』(吉川弘文館二〇〇七)を読んでいたところ、女性の名前の最後の文字(「止め字」と言うらしい)について、大正の終わりから昭和は「子」が一般的であつたこと、「美」は昭和三十年代から増えたこと、最近は多様化していること等が書いてあつた。我が家は昭和一ヶタ生まれの亡母が「成」でシゲコと読み、三十年代生まれの私が「弘実」でクミであるから、普通では読めないし「子」も「美」も付いていないという点で、現代的な名前だという事になるかもしない。もっとも、亡母の場合、明治生まれの祖父が「女に『子』を付けることはもつてのほか!」という考え方の持ち主だつたと

聞いている(漢和辞書で「子」を引いてみてください)。私の場合も父の命名だが、こちらは性別に関係ない名前を付けようとしたようである。いずれにしても、娘にとつては、読めない上に男の子に間違えられることが多いという点で、はなはだ迷惑な命名である。

亡母の名前も私の名前も、その時代の一般的な名前の漢字の使い方からは逸脱している点が共通だ。しかし、命名した父親の意識は大きく違っている。名前というものは、社会や文化と言葉の関係を考える上で興味深いテーマのような気がする。

(非常勤講師)

時は等しきもの

川畑 和成

時は等しきもの。どんな人にも平等に流れ去つてゆく。一年一年同じことを繰り返しているようでも、去年の自分と今年の自分は同一の存在ではない。とは言うものの、自分は進化しているのか。むしろ退化していないか。いや、進化でも退化でも変化していればよいのか。人間は安定を求める生物かもしれないが、この世界で永久不変という事象もありえない。時は人に変化を求めるのである。変化に、進化も退化もない。ただ、事象を見る人の視点に差異があるだけである。

などと言いながら、学部を卒業してから十二年、修士終了から七年もたつてしまつた。年々変化しているはずだが、実感は乏しい。部屋を移るたびに本棚の数だけは増えていくが、並んでいる本の種類はあまり変わらない。歳をとるにつれ、マン

ガの購入数は減つたが、二十年分溜まつた「アニメージュ」は今さら減るわけもない。おそらく、死ぬまで買いつづけるであろう。いや、廃刊するまでか。人生で最初に買った「アニメージュ」は、一九八六年一月号だった。表紙を飾つていたのはアンナ・ステファニー。「蒼き流星S P Tレイズナー」のキャラである。

「蒼き流星S P Tレイズナー」は一九八五年十一月放映開始のSFロボットアニメ。制作は、まだ「日本」が付いていた頃のサンライズだ。舞台は一九九六年の火星。アメリカとソ連が別々に宇宙基地を建設していた、という設定。時代を反映しているというか、八十五年時点では、九六年には火星に到達している、と考えられていたのだ。まさか、九一年にソ連がなくなるとは誰も思つなかつたし。主人公のエイジ・アスカは地球人と異星人との混血で、当初は地球人から疑われていたが、その地球を思う行動によつて仲間たちの信頼を得た。また、激しい戦闘の最中でも、決して人を殺さないというキャラがあつた。

このアニメに出会つていなければ、オタクにはならなかつただろう。オタクには、人生を決定させた作品、というものが存在するのである。今年から、創造表現学科共同研究室の助手になつた。これも変化なのであるが、この先どう変化するか、本人にも全然わからない。ただ、変化を楽しむつもりである。

(一九九七年国文学科卒業)

(一〇〇一年文学研究科修了)

書道コースの「」

下野健児

書道コースも今年でコース誕生から十四年目をむかえました。この間、受験生が減少する中、生き残りをかけての文学部改組にともない、国文学科には現代文化コースの離脱（創造表現学科へ）、日本文学科への名称変更などいろいろなことがあります。しかし、書道コースは日本文学科の中でなんとか生き残っています。

書道コースをめぐる状況は、かなり厳しいものになつてきました。最大の問題は受験生の減少です。もちろん花大書道コースそのものにも問題はあるうかと思いますが、きびしい社会状況下において、全国的に大学で書道をやろうとする学生数そのものが減少していることが大きな原因だと思われます（これは書道界全体の問題でもあります）。そこには就職の問題もからんできます。コース卒業生の就職率が悪いという訳ではありませんが、入学時に多くの学生が持つていた「書道を生かした仕事につきたい」という夢はなかなか叶えられません。教員採用試験はあいかわらず狭き門ですし、今日ではその前段階となる教育実習を受け入れていただく高校をさがすのも大変な状況になります。かといって簡単に書道塾をひらいてやつていけるものではありません。社会福祉関係のように就職に直結する資格がとれるわけでもありません。

しかし、このような状況の中、書道を学ぼうと花大を選んでくれた学生たちは、日々一生懸命に書と格闘しております。このような学生さ

んに「やっぱ、花大来てよかった」「書道やつてよかつた」と思つていただけるように、これからも教員一同、パワー全開で（いつまでつづくかわからりませんが）頑張る所存です。ますますのご支援ご鞭撻のほど、よろしくお願ひいたします。

（日本文学科教授）

唯今、放し飼い（充電？）中

曾根誠一

現在、研究休暇（サバティカル）制度によって一年間講義を免除され、故郷で生活しています。

三十歳になる年に、北九州市にある女子大に赴任すべく故郷を旅立つてから、はや二十八年。毎年帰省していますので、違和感はないものの、平屋の寒さを実感しました（マンションは暖かい！）。最寄り駅までバスで二十五分もかかる不便な田舎暮らしですが、鳶や雉の「ケンケン」という鳴き声で目覚める早朝は、有り難さを唯一実感できる時です。

還暦が視野に入りつつある時期に、後期高齢者の両親の問題等に直面しながら、あれこれと考え、自らを見詰め直す良い機会になつたように思います。学生時代の仲間と久闊を叙する時間が持てたことも、得難い喜びの一つです。

さて、肝心の仕事については、「毎日が日曜」状態なので「惚け」と「怠け」防止のため、週に一日、国文学研究資料館に片道二時間余りかけて通い、調査・研究をボチボチ進めています。八時過ぎに立川駅に降り立ち、喫茶店で目覚ましのコーヒー。二十分钟歩いて、十時に資料館到着。四月

上旬過ぎまでは桜が満開で見惚れ、今は新緑が濃さを増す中、躊躇が書をふくらませています。

個人的には、ケイタイを初めて持たされ、光通信でネット検索をし、軽量のノートパソコンを持ち歩いて、フランシュメモリーをポケットに入れ、出先で仕事をする「現代人」（当たり前の生活？）をしようとは、夢想だにしないことでした。「時代遅れ」を自認する身の激変に、半ば戸惑いつつ、来春「時代遅れ」に戻れるのか。妻との賭の結果や、いかに??

（日本文学科教授）

マンガ文化を支える
「語らない読者」たち

増田のぞみ

ここ数年、担当する三・四回生の演習（卒業論文）において、「不良マンガ」を研究テーマとする学生に毎年出会う。「不良マンガ」とは、成績や素行に問題の多い、いわゆる「不良」や「ヤンキー」と呼ばれる生徒たちを主人公とし、高校など学園を舞台に繰り広げられる物語である。二〇〇七年に公開された映画『クローズZERO』は高橋ヒロシによる人気マンガを原作とした作品だが、「不良」たちの派手な喧嘩シーンも話題となり、現在続編が公開中の人気シリーズとなつている。

「不良」を主人公にした作品群はいわば少年マンガの「裏の顔」といえるほどで、その系譜をたどれば六〇年代から七〇年代に連載された『男一匹ガキ大将』（本宮ヒロシ）など、学園をまとめた「番長」や「総長」を主人公にした作品群が思い出される。八〇年代以降は『BE-BOP-HIGHSCHOOL』（きうちかずひろ）をはじめ、より親近感のある主

主人公を描いた作品が主流となり、九〇年代には『湘南純愛組』(藤沢とおる)、『ろくでなしBLUES』(森田まさのり)、00年代には『WORST』(高橋ヒロシ)と、「不良マンガ」は各年代を通じてヒット作を輩出し続ける人気ジャンルとなっているのだ。学校文化には馴染まなくてもケンカ力が強くて友情に厚い主人公たちのドラマは、幅広い読者を掴んでいる。しかし、これらの作品はこれまでほとんど批評や研究の対象とされてこなかった。それはおそらく、「不良マンガ」がより大衆的な下位ジャンルとみなされ、批評家やいわゆる「マンガ読み」など、マンガについて多くを語り、情報発信する読者から好んで語られる作品ではなかつたためだ。文化庁メディア芸術祭や手塚治虫文化賞などのマンガ賞はもちろん、『このマンガを読め!』(フリースタイル)といった批評家やライターが選出する年間ランキングの類にも「不良マンガ」は縁遠い。では、累計数千万部を誇る高橋ヒロシ作品の読者はいつたいどこにいるのだろう。彼らはおそらく、インターネット上のマンガ関連の掲示板やファンサイトなどで活発に発言する読者ではない。「不良マンガ」を支持しているのは、いわば「語らない読者」なのだ。その声はなかなか届かないとしても、マンガ文化の裾野を支えているのがこれらの「語らない読者」たちであることは間違いない。「不良マンガ」がなぜこれほど支持されているのか、その理由について学生たちが卒業論文で存分に語ってくれることを期待している。

(創造表現学科)

日本文学科共同研究室について

日（金曜日のみ後期）の十二時から十七時までの間でお待ちしています。

秋山妙蓮

(日本文学科共同研究室室員)

日本文学科共同研究室は栽松館六階にあります。この研究室には貴重な書物や雑誌が多数あります。誰でも自由に調べ物や勉強することが出来ます。今は、パソコンで何でも簡単に調べる事が出来ます。しかし、国歌大観などの書物を手に取り何度も何度も自分で調べる事で身につき、自分の力にしていき学んでいく事が出来ます。

調べ方がわからない、資料が見つからないなど心配する事はありません。ここには、三名の室員が交代で研究室にいます。
まずは、穏やかで落ち着いた雰囲気を醸し出している椿井里子さん。現代文化演習の先生です。全てにおいて物腰柔らかですが、学問においては柔と剛を使い分け、学生に勉強の仕方を自然に身につけさせている素敵なお先生です。

次に、とても几帳面でパソコンには大変詳しい道行朋臣さん。あまり多くを語らないイメージがありますが、とても話上手で物知りです。学生から見ると頼れるお兄さんの様な存在です。
最後に私、秋山妙蓮です。研究室に一歩踏み出せないでいる学生、来室した学生を笑顔で迎えます。パソコンは苦手ですが、資料調べなど学生が納得できるまでお手伝いします。

◎ 教員消息
新聞水緒教授が『神仏説話と説話集の研究』(清文堂)の研究により、京都大学から博士(文学乙号)を、三月に取得されました。

◎ 花園大学日本文学会・公開講演会(無料)

新講演会の後、「懇親会」と「新入生歓迎交流会」午後四時から、真人館地下食堂

内 容 十川信介先生

「交通」について——逆走する汽車

※講演会の後、「懇親会」と「新入生歓迎交流会」

◎ 夏目房之介先生 マンガ講座(公開無料)
日 時 八月一日(土)
会 場 無聖館五階ホール

◎『花園大学日本文学論究』創刊号

—(100)八年十一月(販価五百円)
・環太平洋神話への眼差し

—『古事記』稻羽の素戔の事例—

・小沢蘆庵の家集収集と入江昌喜(三三)
—『散木棄歌集』の検討(下)—

曾根誠一

・受贈図書目録(平成十九年十月～同二十年九月)